都市拠点におけるにぎわいづくりビジョン

益城町

2018年12月

本ビジョン策定の背景と目的

～ なぜ、今、「都市拠点におけるにぎわいづくりビジョン」なのか ～

“木山まち”と復興計画

益城町では、平成28年熊本地震からの復興に向け、町全体の復興のイメージを描きながら、町内各地区の状況や特徴なども踏まえて、様々な取組を進めているところです。

その中で、本ビジョンで対象としている木山交差点周辺は、古くから“木山まち”としてにぎわい、また、現代においても、役場や商業、交通などが集中する「町の中心」として認識されてきたという特徴を持っています。

この“木山まち”が、熊本地震により傷つけられたことは、町全体の活力やにぎわいの停滞にもつながっています。町全体が復興を成し遂げ、さらに魅力とにぎわいのある町へと発展していくためには、やはり、町の中心である“木山まち”が元通りになり、さらに元気になっていく必要があると考えられます。

よって、町では、益城町復興計画において、木山地区を都市拠点と位置づけ、「行政・商業・サービス・交通結節等、高次の都市機能誘導を図る」としています。

なぜ、今、「都市拠点におけるにぎわいづくり」を考えるのか？

熊本地震により、“木山まち”に住む多くの住民の生活が傷つけられ、今も不便な生活を余儀なくされている状況です。“木山まち”の復興にあたっては、益城町の中心地として、町全体の復興の期待に応えていくとともに、言うまでもなく、地域住民の生活再建を進めることが重要です。

そのため、“木山まち”では、区画整理事業や街路整備事業をはじめとする様々な事業に取り組み、地域住民の生活再建と、町全体の復興を牽引するにぎわいのあるまちづくりを、同時に進めようとしているところです。特に、地域住民の生活再建にあたっては、住民の皆さんのご意見をしっかりとお伺いしながら、一日も早い生活再建に向けて、取組を進めています。

一方、にぎわいのあるまちづくりについては、“木山まち”の「これまで」と「これから」の両方を見据えつつ、これまでとは異なる、全く新しいまちのにぎわいのイメージも描いていく必要があると考えています。このとき、まず何よりも重要なことは、“木山まち”に関わる全員が、“木山まち”の将来について、共通のイメージを描いていくことではないかと考えています。

この共通のイメージの基礎を作るために、「都市拠点におけるにぎわいづくりビジョン」を策定します。

都市拠点における「にぎわいづくり」の必要性

～ 歴史から見た「にぎわい」と、将来に向けた「にぎわい」 ～

歴史から見た“木山まち”のにぎわい

都市拠点として位置付ける“木山まち”は、古くから長きにわたり、多くの人が行き交い、活動し、新しい情報や文化、物品が集まる、活気のある場所でした。

古くに遡れば、木山神宮に参拝する人や、木山川を使った舟運に携わる人が行き交っていました。また、行き交う人達や乗り物（馬）が足を休めるための宿や、様々な品物の取引を行う市が立つことで、木山神宮を中心とした“木山まち”が形成されていました。

また、近代においては、町内の人達はもちろんのこと、近隣の町村の人も、県道熊本高森線を通って買い物や娯楽を目的に訪れる“木山まち”が形成されていました。

すなわち、“木山まち”は、過去から現在に至るまで、下記のような場所であったと言うことができます。

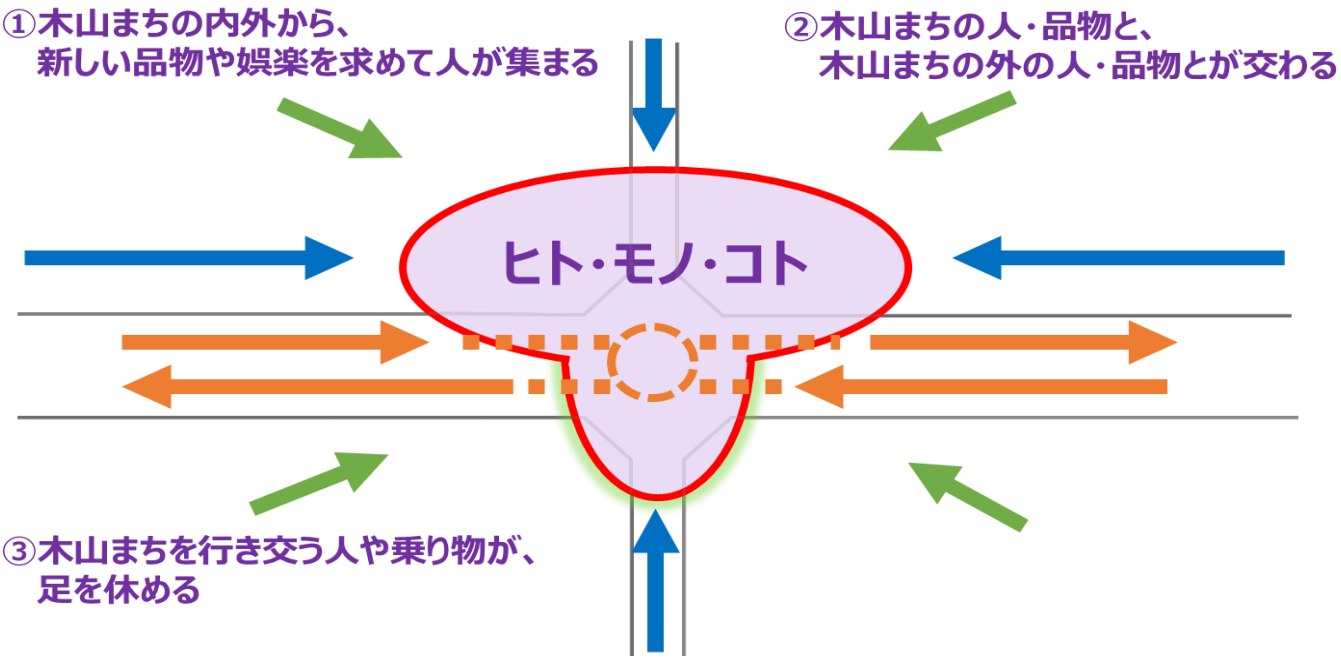
① “木山まち”の内外から、新しい品物や娯楽を求めて人が集まる
② “木山まち”の人・品物と、“木山まち”の外の人・品物とが交わる
③ “木山まち”を行き交う人や乗り物が、足を休める

言い換えれば、“木山まち”は、「多様な人で常に賑わってきた場所」であり、「交流を通じて、時代の最先端の情報や文化、物品が集まり、また発信されていく場所」であったということです。

将来に向けての「にぎわいづくり」の必要性

上記のようなまちの成り立ちは、“木山まち”の地理的・地形的な特徴によるものであり、時を経ても変わるものではありません。また、長い歴史の中で培われた、まちの形成を自ら行い、受け継ぎ、それを誇りに思う文化や気質も時代によって簡単に変わるものではないと考えます。

これから、“木山まち”が都市拠点として復興していくにあたっても、「人で常に賑わっている」「情報や文化が集まり、そして生まれていく」という、いわゆる「ヒト・モノ・コトの集積によるにぎわい」のあるまちづくりが必要であり、それを地域で受け継ぎ、誇りに思っていくことが重要になると考えます。



都市拠点における「にぎわいづくり」の構造

～「非日常」と「日常」が混在するにぎわい～

“木山まち”のにぎわいの構造

“木山まち”は、「ヒト・モノ・コトの集積によるにぎわい」の場所であると同時に、住民が静かに、穏やかに暮らす場所でもあります。「ヒト・モノ・コトの集積」という非日常と、「穏やかなくらし」という日常とが混在することが、“木山まち”らしい魅力でもあり、長くにぎわいが持続してきた背景でもあります。

「非日常」と「日常」が混在するにぎわいづくり

「非日常」と「日常」が混在するにぎわいづくりにあたって、活動が集中しやすい木山交差点の周辺には、土地の特徴も踏まえた、下記のような「ヒト・モノ・コトの集積の場（非日常の場）」が必要です。

（ｉ）益城町らしい「非日常的な楽しさ」を求めて、“木山まち”の内外から人が集まる場（「まちの商店街」、「オープンスペース」）

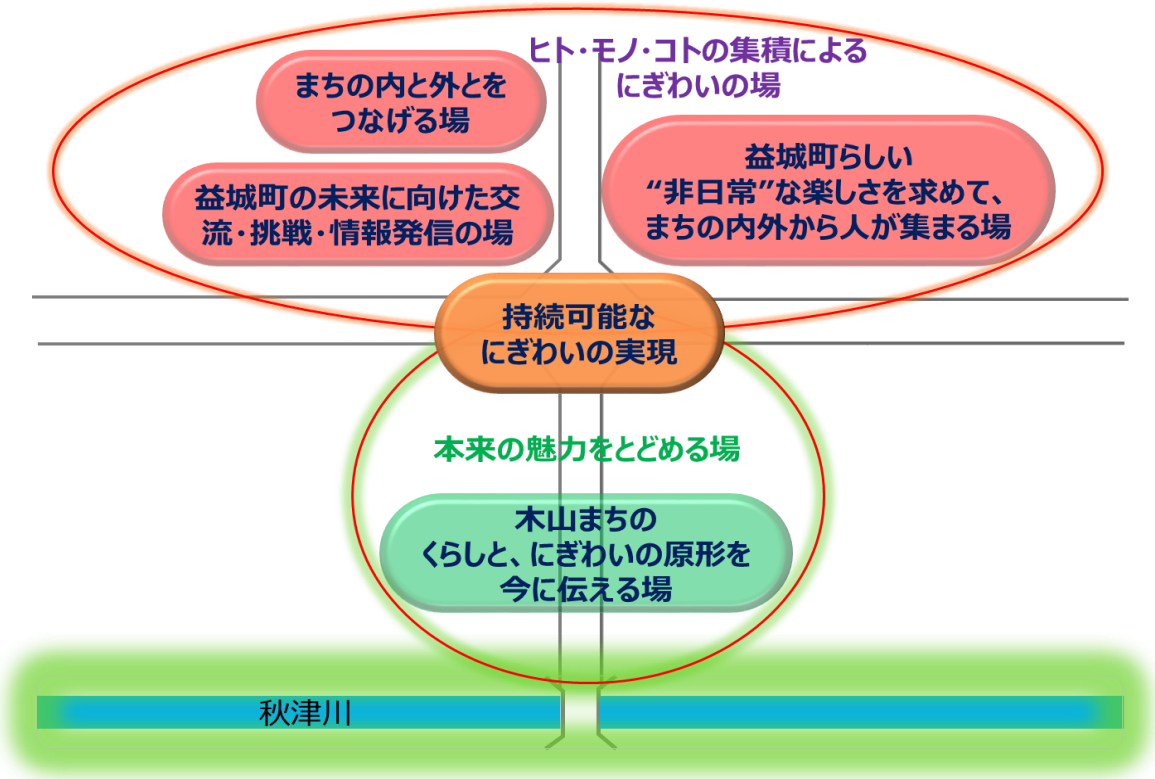
（ii）益城町の未来に向けた交流・創造・発信の場（「物産館等」）

（iii）“木山まち”の内と外とをつなげる場（「交通広場」）

また、木山神宮を中心とした横町線から、まちの原風景を保つ秋津川にかけては、“木山まち”のにぎわいが興った場所であり、“木山まち”の本来の魅力を古くからとどめる場所でもあり、何より、地域住民の日常的な「くらし」の場所であります。

持続可能な“木山まち”のにぎわいづくりのためにも、これからも木山の人達が誇りに思え、“木山まち”を訪れる人も大事に思い続けられる“場”である必要があります。

（iv）“木山まち”のくらしと、にぎわいの原形を今に伝える場（「横町線」）



都市拠点における「にぎわいづくり」の進め方

～「ハード×ソフト」、「新規×既存」で人の動きを作り出す ～

「既存のにぎわいの場」と連携した、「新たなにぎわいの場」づくり

「非日常」と「日常」が混在するにぎわいづくりのためには、前頁に記した５つの「新たなにぎわいの場」づくりが重要です。しかし、新たな場だけで、“木山まち”のにぎわいが作られるものではありません。

日常のくらしの近くで“木山まち”や益城町全体の生活に深く関係する、商店・病院・金融機関や公共施設（役場、文化会館など）などの、いわゆる「既存のにぎわいの場」と適切に連携し、それらのポテンシャルも最大限に活かせるような「新たなにぎわいの場」づくりを考えることが重要です。

場と連携した取組で、人の動きを作り出す

にぎわいは人の動きによって生まれます。この人の動きは、場の存在だけでは作り出せません。
“木山まち”でも、地域住民によるイベントの開催や未来に向けたプロジェクト活動、交通機関の充実など、場を利用する人たちによる、場と連携した取組が必要不可欠です。もちろん、行政も、場の利用者として関わるとともに、地域の活動への支援等を積極的に行っていきます。

「物産館等」について

～ 益城町の未来に向けた交流・創造・発信の場 ～

益城町は、豊かな農産物をはじめとして、多様な特産物（モノ）を有する町です。また、都会の便利さと自然の優しさが混在する中で、多様な人（ヒト）が暮らし、活動（コト）を行う町でもあります。

「物産館等」は、益城町の重要な資源であるヒト・モノ・コトが、町外のヒト・モノ・コトとも交流しながら、益城町の未来に向けた新たな価値を創造し、その成果を発信し続けていく場、いわば"益城の未来箱"となっていきます。

「物産館等」とは？

益城町のすてきな品物や情報に触れられる場所

益城町の農産物等を購入したり、農産物を使った料理や飲物を楽しんだり。これまで気づかなかった益城町の魅力まで含めて全部、たっぷりと感じられる場所です。

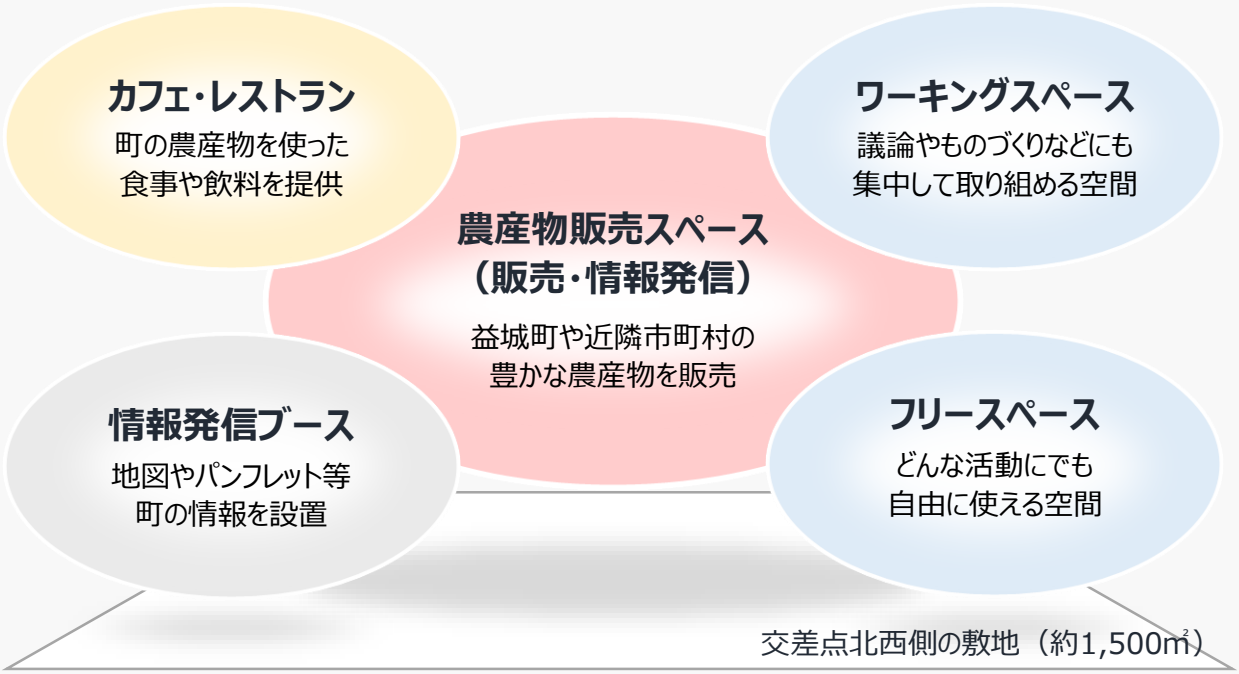
いろんな人が、いろんな目的で集い、交流する場所

散歩中の人やお迎えを待っている人。一人の人や友達と一緒の人。いろんな人が、思い思いの時間を豊かに過ごしながら、時として、互いに交流しあう場所です。

町の未来に向けた「新たな価値」と「新たなつながり」を創造する場所

益城町のヒト・モノ・コトを活用して新たな価値を創造し、発信していきたい。そういう想いを持つ大人・若者・子どもたちや地域の企業などが集まって、議論したり、ものづくりしたりしながら、町の未来に向かって、新たなつながりも創造していく場所です。

「物産館等」を構成する要素（案）



※敷地面積については現在の予定であり、今後の設計等により、変更する場合もあります。

「まちの商店街」について

～ 益城町らしい「非日常的な楽しさ」を求めて、“木山まち”の内外から人が集まる場 ～

“木山まち”は、古くから、多くの人が行き交い活動する場所です。そして、”木山まち”の内外から、新しい品物や娯楽を求めて人が集まる場所でもあります。

この歴史や土地の特性を考えると、“木山まち”には、いつもと“ちょっと”違う雰囲気の中で、“ちょっと”違う飲食や買物を通じて、“木山まち”の人や“木山まち”を訪れる人に楽しさを提供する場が必要です。

これが、“木山まち”らしい、「まちの商店街」となります。

「まちの商店街」とは？

“ちょっと”非日常的な雰囲気の中で、飲食や買物を楽しめる場所

スーパーやコンビニエンスストアでの買物や自宅での食事とは“ちょっと”違う、特別感のある雰囲気の中で、飲食や買物を楽しめる場所です。
もちろん、それは特別な日だけに限りません。毎日の生活にも、“ちょっと”非日常を取り込める場所でもあります。

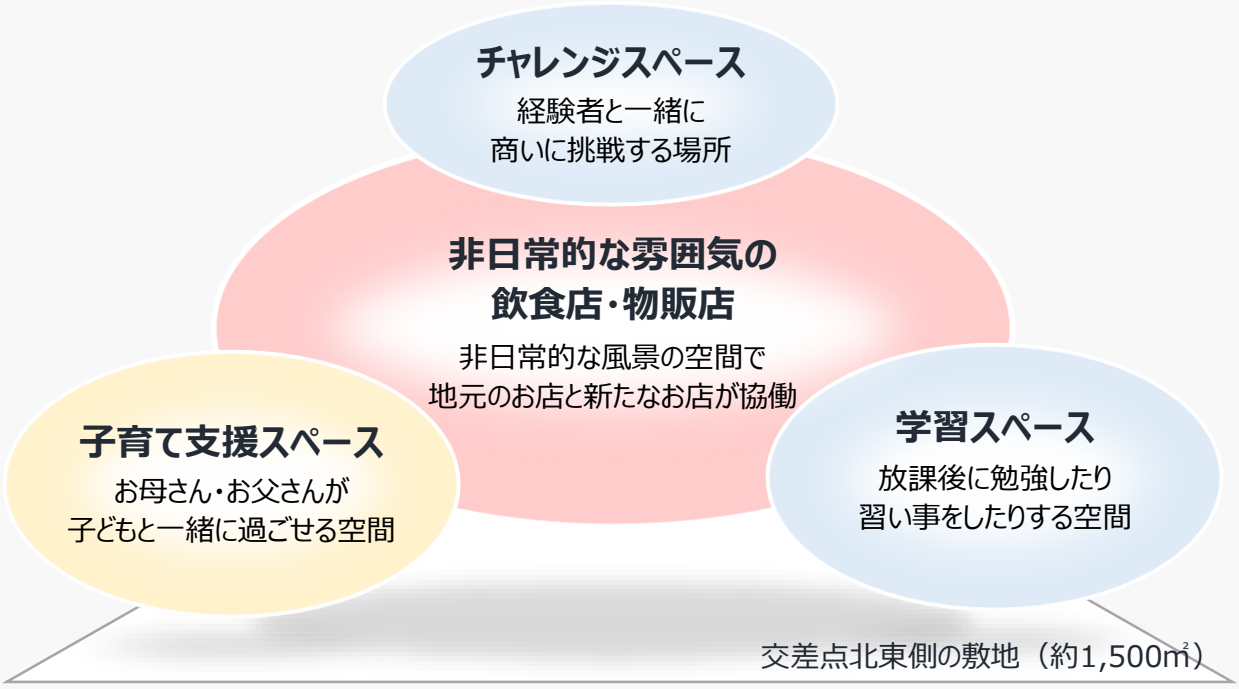
いろんな人が、いろんな日常を過ごす場所

お母さんやお父さんが子どもと楽しく過ごす場所、放課後に遊んだり勉強したりする場所、お昼ご飯を買って食べる場所、ちょっと飲みに行く場所。
いろんな人が、それぞれの日常を、楽しく穏やかに過ごす場所です。

お店同士が交流し、チャレンジする場所

地元のお店と、新たなお店や若い人とが交流しながら、これまでとは“ちょっと”違う、新しい“木山まち”の商店街の姿にチャレンジしていく場所です。

「まちの商店街」を構成する要素（案）



※敷地面積については現在の予定であり、今後の設計等により、変更する場合もあります。

「交通広場」について

～ “木山まち”の内と外とをつなげる場 ～

古く、“木山まち”が宿場町であった頃には、行き交う人にとって馬は大切な乗り物だったと想像されます。そして、“木山まち”が都市拠点として復興していく際にも、新たな人の流れと一緒に、バスやタクシー、自家用車、自転車などの乗り物がたくさん集まると考えられます。

古くは馬、現代は多様な乗り物という、いろんな交通の変化を受け入れながら、地域の交通の要衝として、“木山まち”の内と外とをつなぎ、そして、“木山まち”の外から外への交通の利便を支える場所。それが“木山まち”の「交通広場」です。

「交通広場」とは？

“木山まち”からお出かけする人が出発する場所

“木山まち”から町内の各所や町外に通勤・通学・通院等で出かける際に、徒歩や自転車で来たり、自家用車で送ってもらったりする場所です。もちろん、帰ってくる場所でもあります。

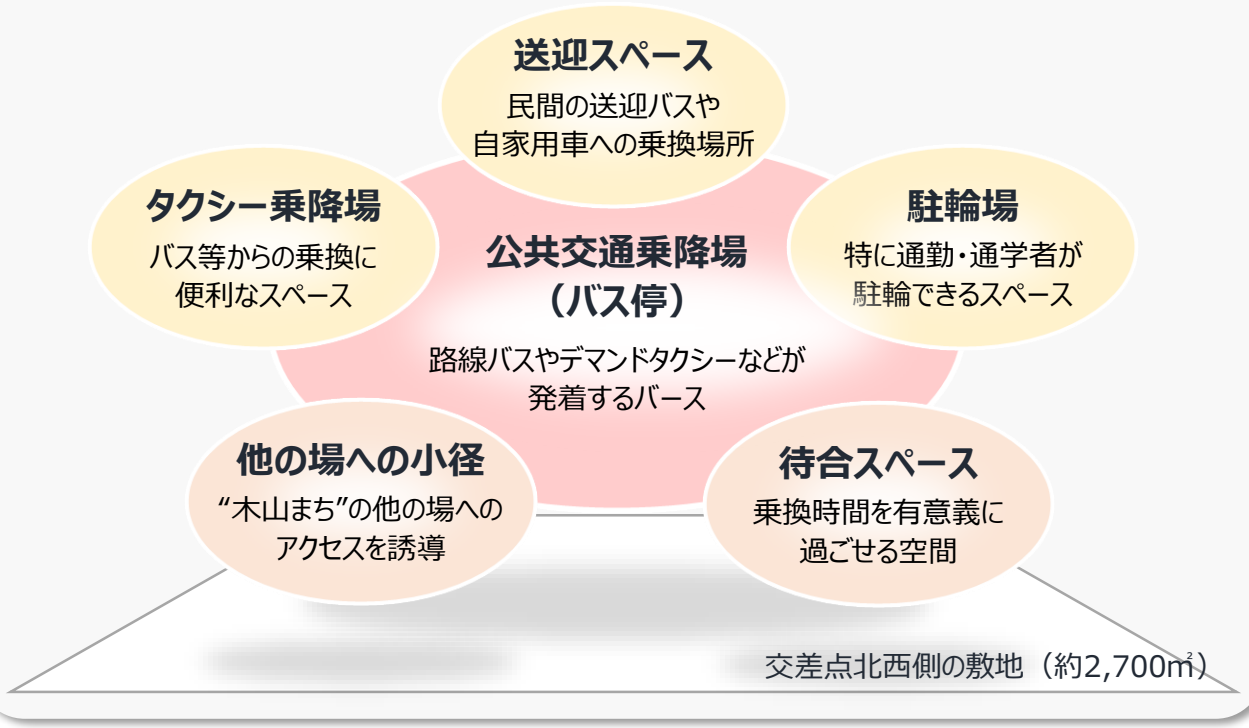
“木山まち”に来る人を受け入れる場所

“木山まち”を訪れる人が、最初に“木山まち”に触れる場所が「交通広場」です。“木山まち”の玄関口として、“木山まち”の暖かい雰囲気を最初に伝える場所になります。

便利に乗り換えができる場所／ちょっと寄り道したくなる場所

「交通広場」は、“木山まち”以外の人が“木山まち”以外に向かう時に乗換で利用する場所です。便利に乗り換えられる場所であるとともに、乗り換える時に「ちょっとだけ“木山まち”に寄り道していこうかな」という気分になれる場所でもあります。

「交通広場」を構成する要素（案）



※敷地面積については現在の予定であり、今後の設計等により、変更する場合もあります。

「オープンスペース」について

～ 益城町らしい「非日常的な楽しさ」を求めて、“木山まち”の内外から人が集まる場 ～

木山交差点付近は、物産館等やまちの商店街などにヒト・モノ・コトが集まり、常ににぎやかな場所となっていきます。一方で、持続可能なにぎわいのためには、にぎわいの中にも、訪れた人が時間を忘れてたたずみ、“ほっ”と一息つけるような空間や、いつものにぎわいとは一味違う彩（いろどり）を添えるイベント等の活動を行える空間も必要です。

そのような空間を、「まちの商店街」や道路と連続した場所に「オープンスペース」として設けます。

「オープンスペース」とは？

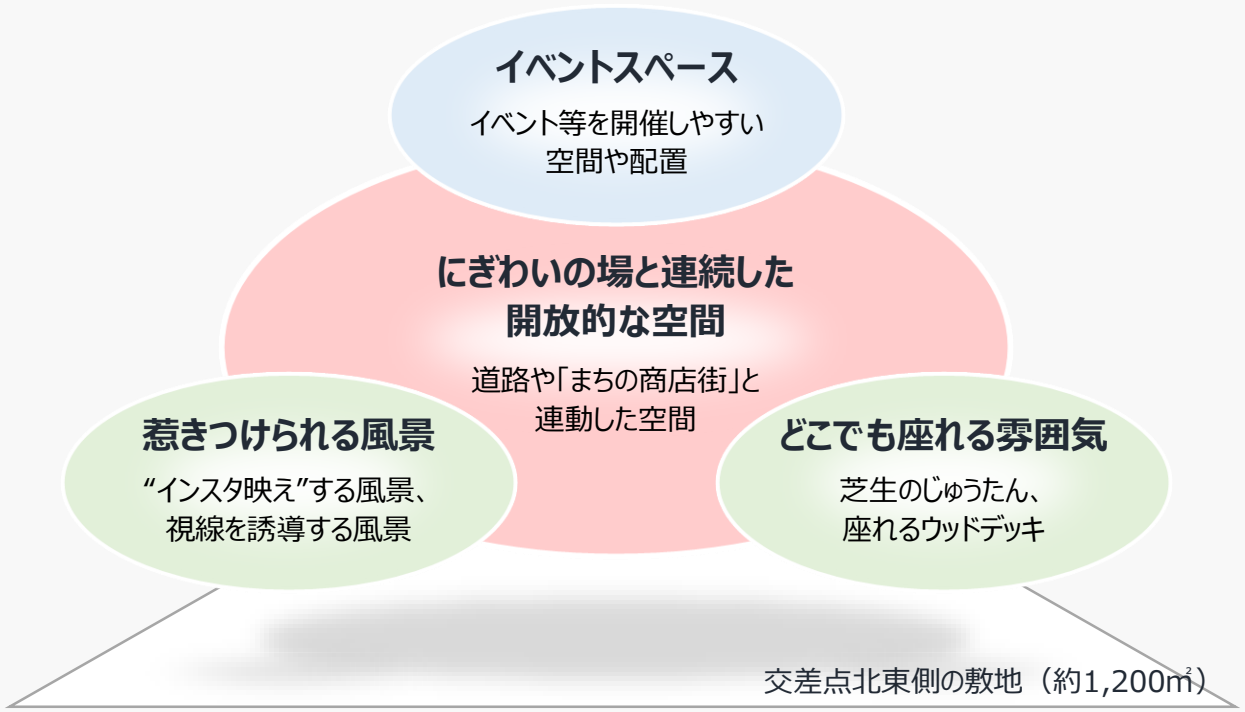
にぎわいの中で“ほっ”と一息つける、憩いの場所

“木山まち”の人々が散歩の途中で休憩したり雑談したりする場所、周辺で働く人がお昼ご飯を食べる場所、お母さんが安心して子どもと遊べる場所、子どもたちが友達と語らう場所。賑やかな都市拠点のなかで“ほっ”と一息つける、憩いの場所となります。

いつものにぎわいとは一味違う彩（いろどり）を添える活動の場所

地域住民や商店主、時には行政によるイベント等の開催を通じて、いつもとは異なるヒト・モノ・コトが集まり、いつもとは一味違うにぎわいの風景を生み出す場所となります。

「オープンスペース」を構成する要素（案）



※敷地面積については現在の予定であり、今後の設計等により、変更する場合もあります。

「横町線」について

～ “木山まち”のくらしと、にぎわいの原形を今に伝える場 ～

木山神宮を中心とした横町線から、まちの原風景を保つ秋津川にかけては、“木山まち”のにぎわいが興った場所であり、“木山まち”の本来の魅力を古くからとどめる場所です。また、この道は、木山交差点（にぎわい復興の中心）から秋津川河川公園（震災前からの地域資源）までを結ぶ道でもあります。

こういった場所の特性を活かしながら、“木山まち”の Civic Pride（地域の誇り）の場所として、”木山まち”の歴史と復興へのあゆみを感じられるような“みちづくり”を行います。

「横町線」とは？

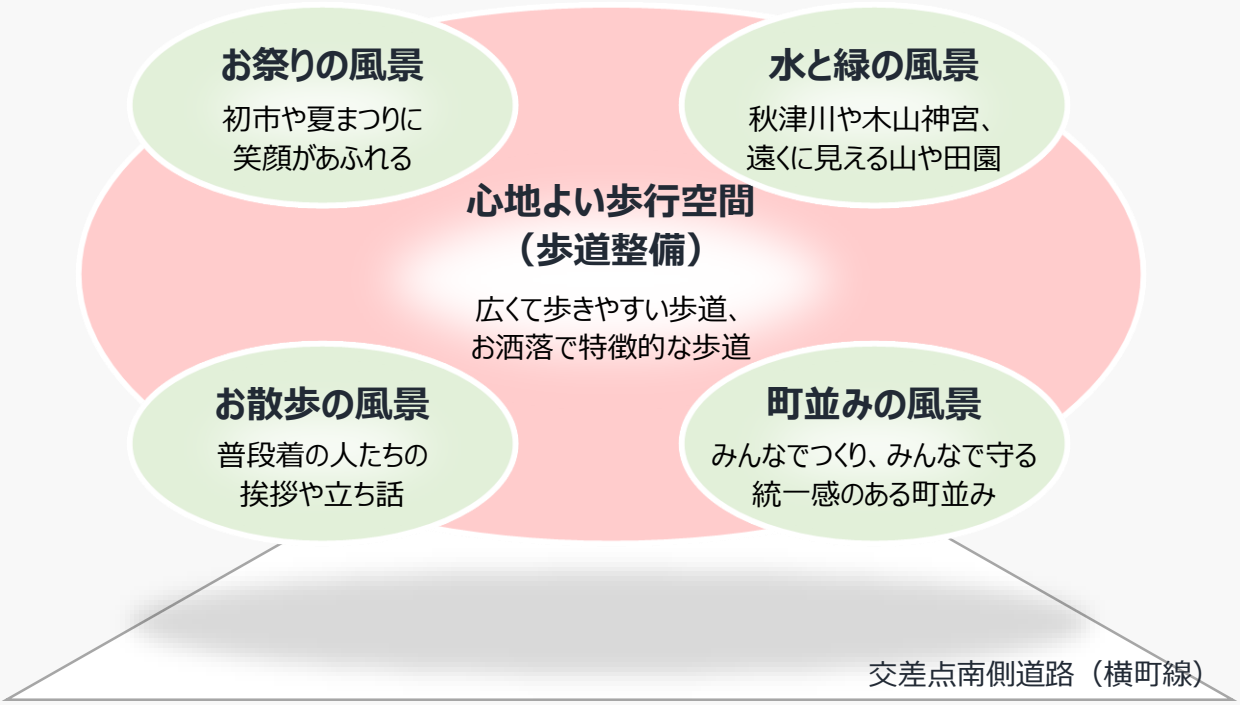
“木山まち”で暮らす人たちが穏やかに過ごす場所

“木山まち”で暮らす人にとって、横町線は、木山神宮にお参りしたり、秋津川の四季の風景を見に行ったり、散歩しながら地元の人とお話したりと、穏やかな時間を過ごす場所です。そしてこれからも、そのような場所であり続けます。

“木山まち”を訪れる人が、“木山まち”の本来の魅力に触れる場所

木山交差点から秋津川河川公園に向かって歩くと、“木山まち”の変わらぬ風景にたくさん出会うことができます。また、初市や夏まつりなど、益城町を代表する催事も行われます。“木山まち”を訪れる人にとって、横町線は、“木山まち”で長く愛される風景や本来の魅力、地域の誇りを感じられる場所となります。

「横町線」を構成する要素（案）



都市拠点における「にぎわいづくり」の体制

～ “木山まち”に関わる全員が、“心を一つ”にした協働のにぎわいづくり ～

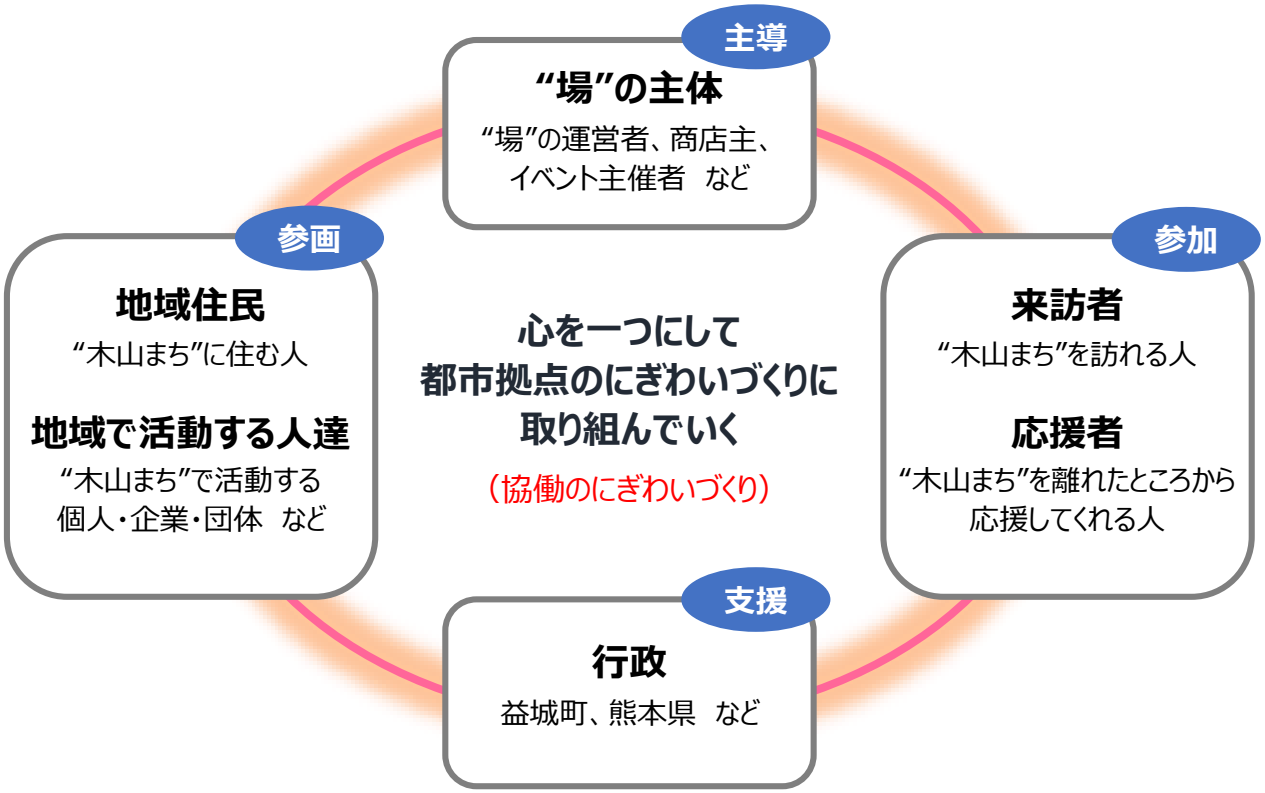
関係者全員での「協働のにぎわいづくり」

“木山まち”のにぎわいは、多くの人たちによって作られてきました。これからのにぎわいづくりも、様々な考えを持つ、多くの人たちの力によって進められていくものと考えています。

特に、都市拠点における“場”の運営者や商店主、イベントの主催者など、“場”の主体となる人たちが、都市拠点のにぎわいづくりを主導する役割となります。また、“木山まち”の住民や、“木山まち”で活動する人達（個人、企業、団体など）も、“木山まち”の主役として、都市拠点のにぎわいづくりに積極的に参画していくことが期待されます。さらに、“木山まち”を訪れる人や、“木山まち”を離れたところから応援してくれる人も、都市拠点のにぎわいづくりにおいて重要な役割を担うと考えられます。

こういった、“木山まち”に関係する全員が“心を一つ”にして、都市拠点におけるにぎわいづくりに取り組んでいくことで、“木山まち”らしいにぎわいが実現されるものと考えます。

「都市拠点のにぎわいづくり」における行政の役割

益城町や熊本県も、「都市拠点におけるにぎわいづくり」に対して、その取組を支援するという役割を持って、積極的に関わっていきます。

現時点では、場の整備に対する支援や、そこで行われる活動に対する支援、場の積極的な利用、他の行政機関等との調整などの支援を考えていますが、状況に応じて、その時々で必要とされる支援を行っていきたいと考えています。